The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	雰囲気としての美 : G. ベーメの「新しい美学」の立場から
Author(s)	立野, 良介
Citation	文芸学研究. 2011, 15, p. 14-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50936
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

雰囲気としての美

G. ベーメの「新しい美学」の立場から

立野　良介

はじめに

「新しい美学」を提唱するG.ベーメ（Gernot Böhme, 1938-）は、「雰囲気」を自らの美学の基礎概念として導入し、芸術作品のみならず、私たちの日常社会を「感性論（Aisthetik)」の視点で捉え直そうとする。本論ではこの「新しい美学」の立場から美の問題を論じよう。

ベーメは『実用的見地における人間学（Anthropologie in pragmatischer Hinsicht)』(1985)、『生態学的自然美学の為に（Für eine ökologische Naturästhetik）』(1989)、『自然のものが当たり前――複製技術時代における自然について(Natürlich Natur. Über Natur über ihrer technischen Reproduzierbarkeit)』(1992)、『雰囲気――新しい美学への試論（Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik)』(1995)、『新しい視点からみたカントの判断力批判（*Kants „Kritik der Urteilskraft" in neuer Sicht*)』(1999）といった著作に収められた論文で、美を「雰囲気（Atmosphäre)」、あるいは「何か雰囲気的なもの（etwas Atmosphärisches)」(KnS,39）として理解している(1)。

あらかじめ断っておくがベーメは、美と崇高を特別視してきた従来の美学には否定的である（cf. Ais, 68; Atm, 35)。とはいえ、美や崇高に対して幾つか文章を書いていることからも理解できるように、美や崇高自体を否定しているわけではない。むしろベーメは、美と崇高（崇高もベーメは雰囲気として理解している）を含む多様な「雰囲気」の意味を考察しようとしているのであり、美

や崇高も、雰囲気の一つとして評価されているのである。ベーメが批判するのは、それ以外の雰囲気に目が向けられていなかった点なのである。

美をテーマとする理由は、美がおそらく美学史上最も問題にされてきたテーマの一つであること、また本質的に芸術作品の理解を問題にしており、美の問題を例えば趣味判断の問題として論じてきた従来の美学とは異なったベーメの視点が提示できると判断したからである。

本論では、まず第1章では、主に『アイステーティク――一般知覚論としての美学講義(Aisthetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre)』(2001) を参照し、雰囲気とは何であるか、また美が如何なる点で雰囲気として理解されるかを考察する。第2章では、この書物と前述の幾つかの論文から美が他の雰囲気とはどの点で区別されるかを考察する。第3章では、前述の著作のベーメの幾つかの論文に基づきつつ、自然、日常生活、芸術、人間において今日美がどのような意味と問題があるかを考察する。

第1章　雰囲気としての美

第1節　美の主観性と客観性

ベーメが如何に美を雰囲気として理解しているかを見る前に、美の体験、「美しい」と感じる体験がどのようなものかをまず簡単にまとめよう。もちろん、美の体験は簡単にまとめられるものではないのかもしれないが、後の美についての考察の為の少なくとも手がかりにはなるであろう。

「美しい」という言葉は、「良い」「正しい」と同じように、何らかの価値の高さを意味するのに用いられることが多い言葉である。ところが、後の二つと比較すると、特に身体によってその場で感じられるものに用いられる傾向が強いと言えよう。もちろん、「美しい魂」のような、身体で感じるとは言い切れないものにも用いられないわけではない。また「美しい行い」のように、ある行

為の立派さを表す場合もあるだろう。とはいえそのようなケースは限定されており、目に見えるもの、耳に聞こえるものなどに用いられている場合の方がずっと多いであろう。

身体で感じられるもののなかでも、特に視覚と聴覚を通して感じられるものを言い表すのにこの言葉が用いられることが多いと言ってよいであろう。もちろん、日本語でも「美味」という表現はあるし、ドイツ語でも「素晴らしい体験」を „ein schönes Erlebnis“ と表現したりもする。しかしながら、「美しい」という言葉は、おそらくどの言語でも、まず視覚的に知覚されるものに用いられていることが多く、おそらくその次に聴覚的に知覚されるもの用いられているように思われる。視覚的現象では、自然、人の手によるもの（特に芸術作品）、特定の男女などにこの言葉は広く用いられている。美しいという言葉が好んで用いられる対象もある程度は特定されているようである。花、星、宝石や貴金属、人間では女性のほうに好まれて用いられているように思われる。聴覚的対象としては、鳥や虫の声などの特定の自然音、楽器の音色や人の声、それに音楽作品（旋律など）で好んで美しいという言葉が用いられているように思われる。

美の性格として指摘されることの一つに、美の主観性を挙げることができよう。美は、それを感じる人間を前提にしているのであるから、このことに不思議はない。それゆえ、人によって何が美しいかの判断が異なることもよくある。目の前にある幾つかの花を見て、どの花が美しいかを互いに指摘するならば、それぞれが別の花を指すことは容易に想像できるだろう。

しかしながら、美の問題をただ主観や主体の問題としてのみ理解することにも問題があるのではないか。美にはある種の客観性も認められるように思われる。そもそも美は客体に認められる属性であるかのようにも見える。また私たちが美しいと形容する対象が、ある程度共通している点も指摘されよう。既に述べたように、花、星、宝石など私たちが好んで美しいと呼ぶ対象は人類の間

である程度共通している。また、山上からの眺望、澄んだ川の流れ、あるいは、鶯の鳴き声などもそうであろう。反対に、蛆虫が群がる腐敗しているもの[2]、工事現場の騒音などは、誰にとっても不快なものに違いない。

ベーメの雰囲気概念は、この美の主観性と客観性という一見相反するかのような性格を理解する為に有効であると思われる。では雰囲気とは何か。

第２節　雰囲気の感知

「雰囲気（Atmosphären)」という概念は、ベーメがシュミッツ（Hermann Schmitz,1928-）から受け継いだ概念であるが、日常生活でも広く用いられている。例えば、「雷雲におおわれた空の不穏な雰囲気」、「谷間の愛らしい雰囲気」「会議の張り詰めた雰囲気」(Atm, 21-2）といったものである。雰囲気は一見「何か不明確なもの、言い表しがたいもの」(Atm, 21)、言語化しえないものを無理に表現しているだけに見える。ゆえに、このようなものを概念として用いることに違和感を覚える人もいるかもしれない。だが、これらの表現は私たちが感じ取った何らかの「性格」(Atm, 22）を間違いなく表しているとベーメは考え、美学的に重要な概念たり得ると理解するのである。

ベーメは、私たちの知覚のあり方を幾つかの例を分析することで、雰囲気とはどういうものであるかを明らかにし、また何故この概念が美学的に重要であるかを探っている。

例の一つとして挙がるのは、暗いホテルの一室で、羽音によって蚊に気づくというケースである（Ais, 35ff.)。この場合、私たちが最初に知覚するのは蚊という生物ではない。もちろん、聞こえてくる羽音は、聴覚的に体験されるものである。このこと自体は確かであるが、一方で羽音は「いわば身体全体」で、不安や緊張、防御の構えとしても「感知」[3]されているのである。ベーメは、私たちが最初に知覚するものは身体全体で感知される「何か威嚇的なもの」であると理解する。この威嚇的なものを私たちはプーンという音であると同定し、

プーンという音として認識することによって威嚇的なものから「距離(Abstand)」(Ais, 42) を置き、音の正体が蚊であることを突き止める。

別の例は、睡眠中に寒さを知覚し目覚めるというケースである(Ais, 38f.)。私が知覚する寒さは、外部にある明確な対象ではない。温度計などで計測される寒さの数値のことでもない。寒さとは、外部の状態を意味していると同時に、それを知覚する私自身の身体の状態を意味しているのである。外部のある状態が、私自身の身体の状態を変化させることで、寒さは知覚されるのである。

以上の例から、ベーメはこの最初に知覚される「何か威嚇的なもの」「寒さ」とは、身体全体で、身体の「情態性 (Befindlichkeit)」[4]の変化を通して感知されるものだと理解し、これを「雰囲気」と呼ぶ。また雰囲気の感知は「自分自身が今ここにいるということと、自分がいる場所で自分自身はどのような状態で存在するのかということについての経験」(Ais, 42)[5]である。つまり私は今現在寒さを感じているものとして、自己を発見するのであり、これをベーメは「現前性の感知 (das Spüren von Anwesenheit)」の経験と名づける。この時「知覚主体としての私と何ものかがその場に存在することを同時に不分離に感知」[6]している。すなわち、雰囲気を知覚する際、私たちは「周囲の環境の質」と、それに応じる私たちの情態性とを「同時に不分離に」感知するのである。寒さという周囲の質と、寒いという自己の状態とは切り離せないわけである。

こういった雰囲気の知覚にはもちろん、ある特定の感覚器官が必要である。しかしながら、「知覚は、厳密にこの感覚器官、あるいは身体の部位に特定されるものではない」(Ais, 40) とベーメは言う。プーンという羽音は「何か威嚇的なもの」として身体全体の緊張によっても感知されるだろうし、木犀の心地よい香りは、身体全体の寛ぎによっても感知されるだろう。もちろん、特定の感覚器官がまったく関与しないわけではない。つまり「この雰囲気的なものは、それ自体、感覚の質に基づいて分離はできないが感官に照応して特殊化できる」(Ais, 42) のであり、距離を置いて雰囲気を特定する際に、目や耳から知覚され

るものとして判断されるのである。

ベーメによると、最初の知覚対象たる雰囲気は「何らかの情動的色合い」(Ais, 42) を持っており、それは「何かの現前性 (Anwesenheit von etwas)」として受け止められる。さらに「この何かを知覚が追い求めるほど、知覚は雰囲気から距離を置き、物としての知覚対象に収斂する」。その結果「自我極 (Ichpol)」と「知覚対象 (Wahrnehmungobjekt)」とが分離するのである。

第3節　進入と違和

雰囲気は「それに情動的に襲われること」(Ais, 46) によって感知される。この際襲われを通して生じる「気分 (Stimmung)」は、「雰囲気の主観的な極 (der subjective Pol der Atmosphäre)」としてのみ経験されるとベーメは述べる。しかしながら雰囲気は、「私から区別される何か」なのであり、「他の諸々の経験 (anderen Erfahrungen)」によって発見されるものである。すなわちベーメは、雰囲気は私の外部にあって私を情動的に襲うものであり、主観の関与によって初めて発見されるものであると理解し、そのことで、雰囲気のもつある種の客観的性格を捉えようとしているのである。すると雰囲気の現前性を感知している時は、主客はまだ未分離な状態にあることになる。

雰囲気は、「進入 (Ingression)」と「違和 (Diskrepanz)」という二種類のあり方で知覚されるとベーメは述べる。

進入経験は「祝祭的雰囲気が漂うホールに足を踏み入れる」場合のように、ある空間に入り込むことで何らかの雰囲気を知覚する経験である。この場合雰囲気は、さしあたり「私とは区別される何か」(Ais, 47) であり、ある種の気持ちを起こさせる「気分」を持つものである。ところが、この気分はまだ「私の気分」なのではない。私が発見するのは、気分の「兆候 (Anflug)」であり、その気分に染まることで、この気分は「私自身の気分」として感知されるのである。それに対して違和経験は、例えば「悲しい出来事で滅入っているときに春

の晴れやかな日差しを経験する」場合のように、あらかじめ持っている私の気分と、それを変更させる周囲の雰囲気の「気分づけるもの（Anmutung)」とが緊張状態をつくりだす経験である。この場合、私は、晴れやかさを周囲の状態として感知するのであるが、私があらかじめ身体全体で感じている悲しさとは異質であるがゆえに、晴れやかさはよそよそしく感じられるのである。

どちらのケースでも、雰囲気の「準客観的（quasi objektiv)」(Ais, 47）というべき性格が認められる。雰囲気はまだ「私の気分」にはなっていない「誰のものでもない気分」であり、空間のなかを浮遊する「漠然と広がって溢れ出る」(Ais, 48）ものである。ベーメは雰囲気を、「襲い来る感情の諸力」「諸気分の空間的な担い手」(Atm, 29）とも呼ぶ。そして、その気分が「私自身の感情」として確認されるならば、それはシュミッツが「厳密に主観的な事実」(Ais, 49）と定義づけるものであり、私だけにしか分からないニュアンスを持つものである(7)。つまり他者には、私の感じている悲しさは決して分からないのである。ところが、雰囲気は、私のみならず、他人も感知できるものであり、それゆえ私たちは互いにその雰囲気の性格について了解することができるとベーメは理解する。

以上の分析を踏まえ、美について考えてみよう。

美に確認された主観性と客観性をあわせ持つかのような性質は、美にもまた雰囲気的な性格が見て取れると理解することで納得のいく説明が得られるだろう。満開の桜の花を見るとき、私たちはそれを近くで一緒にそれを見ている人も美しいと感じるであろうものとして見ているに違いない。いわば美には「準客観的な性格」が見て取れるのである。美しいものとしてイメージされるものに、傾向性が認められることもそのことで理解できるであろう。とはいえ、美の持つ主観的性格は否定できないものであり、私には他者がどのようにその桜の花を美しいと感じているかは、正確には分からないのである。

その点は進入と違和という観点で美を考察すると理解できよう。「美しいもの」は、言わば私たちに襲いかかる、誰のものでもない気分であり、私たちの

あらかじめ携えている気分次第では、それは喜びをもたらすこともあれば、よそよそしく感じることもあるだろう。満開の桜に魅了され喜ぶ自分を発見することもあれば、それがよそよそしく感じることもある。他者が実際どのように感じるかは私たちには決して分からない。にもかかわらず、私たちはそれが美しいものであることが互いに了解可能なのである。

第４節　雰囲気の概念と雰囲気の産出

雰囲気を理解する上で、雰囲気と雰囲気の概念との区別についても述べておかなければならない。雰囲気は、雰囲気に襲われることで知覚されるものである。ところが、雰囲気の概念を手に入れる為には、私たちは襲われという次元から離れて、中立的な立場で、いわば「三人称としての私」(Ais, 51) の立場で、それを概念で特徴づける必要がある。このことが、「雰囲気と雰囲気の概念との関係を特別に難しくしている」(Ais, 50) のである。

社会において雰囲気として表現され得るものには、例えば「力強い雰囲気」「憂鬱な雰囲気」といったものから、「秋めいた雰囲気」「小市民的雰囲気」(Ais, 90) まで様々である。これらの表現で何らかの共通の理解が得られているとすれば、それはある種の私たちを「気分付ける (anmuten)」(Ais, 52) 共通の性格を私たちが経験しているからに他ならないとベーメは理解する。ベーメはそれを「雰囲気の性格」と呼び、その雰囲気の性格こそが雰囲気の「何であるか (Was-Sein)」であるとも述べる。しかし、雰囲気が概念化される為には、私たちの「自我と対決する」必要がある。すなわち、雰囲気に襲われている状態から離れ、社会的文脈でその雰囲気を特徴づける必要性がある。

以上のベーメの考察からは、私たちが概念的に美として理解しているものもまたそのような雰囲気の概念であることが理解できる。また美の雰囲気の本質は、美の雰囲気に共通する性格のうちに求めることができるのではないということが推測されるであろう。

社会において多様な雰囲気の概念が存在していること、雰囲気の本質はその性格に認められること、このことは、雰囲気の産出可能性とも関係している。すなわち、私たちは、対象の側から、対象が持つ様々な性格を通じて雰囲気をつくり出すことができるのである。例えば、スーパーマーケットでは購買意欲を駆り立てるような楽しげな音楽を用いることができるし、また舞台演出では、道具、音響、証明などを通して、大都会の雰囲気、路地の寂れた雰囲気などを作り出すことができる。ベーメは雰囲気を産出する仕事として「美的な仕事(ästhetische Arbeit)」(Ais, 52f.) の存在を指摘する。インテリア、デザイン、広告などの仕事がそれである。芸術家もまた雰囲気の産出と深く関係している職業だと理解できる。芸術家が創作する形、色彩、音などは、直接に私たちの身体の情動性に作用を及ぼすものである。このように雰囲気は、人間の知覚から近づき得るだけではなく、「事物的構成要素」(Ais, 54) のほうからも近づき得るものである。

美もまた作り出すことができるものであろう。私たちは、部屋の絨毯、家具などを変えたり、掃除をしたりすることで部屋を美しくする。衣装や、化粧などによって、美しい人間になろうとする。美の演出は、私たちの日常生活で広く見られるであろう。

第2章　美の雰囲気とその性質

第1節　美の情態性

美をある種の雰囲気であると理解するならば、問題になるのは、美が他の雰囲気とどの点で区別されるかということ。美の雰囲気に固有の「性格」は一体何かということである。

雰囲気が情動的な襲われとして経験されるものであるとするならば、美の雰囲気に固有の性格は、私たちが美にどのように襲われ、どのように「気分付け

られる」のかを知ることで理解されるであろう。それを知る為には、美の雰囲気が私たちをどういった状態に変化させるのか、すなわち私たちの「情態性(Befindlichkeit)」(Ais, 73ff.) が問題になる。

ここで注目されるのは、私たちの「身体 (Leib)」である。何故なら、既に述べた通り、私たちは雰囲気を唯一つの感覚器官によって知覚しているだけではなく、いわば身体全体で知覚しているからである[8]。私たちは、身体的に何らかの襲われを経験することで「主観的」なのであり、また他人の経験とは代替不可能な私自身の経験を得る。美の雰囲気も何らかのあり方で、私たちの身体に襲いかかるものであり、その襲われのあり方にある共通性を私たちが認めることができるから準客観的であるが、しかし個人がどのようにそれを経験しているか、そのニュアンスまでは分からないものであり、その点で主観的に感じられるものなのである。

私たちの情態性のあり方をベーメは次のような例を挙げて探っている。「私は悲しい、楽しい、夢中になっている、恥じ入っている、不機嫌だ、気分がよい、気分が悪い」(Ais, 81.)。これらの表現は、何らかの「状態にあること(Sich-befinden)」を表している。またそれは、例えば「私はXを憎む」といった「何かに向けてあること (Gerichtet-sein)」(Ais, 81) すなわち志向性とは区別される。もしも私の情態性を述べるなら「私は憎しみに満ちた状態である」と表現しなければならない。これらいずれの状態も、何らかの身体の状態を示していることが理解できる。すなわち、「悲しみは確かに圧迫する性格と引きずりおろす傾向を含んでおり、羞恥は逃げ出したくなるような傾向を、陽気さは多重的で不確かな方向性をもつ拡張傾向を含んでいる」(Ais, 82)。これらの状態は、「身体空間の変容」「感知された空間性そのものの変更」(Ais, 82) を示しているのである。

私たちが感情や気分という言葉で表現しているものは、身体の状態と密接に関係している。シュミッツの「新しい現象学」はこの点を明らかにしようとし

ていた。シュミッツは、身体が代替不可能であるという点から、厳密な意味での主観性の根拠を基礎づけ、他方で人類に共通の身体のあり方を、「身体のアルファベット」(II/1, 169-172; DuG, 121-127) という概念でまとめられるような幾つかの概念を用いて捉えている[9]。ベーメはこのシュミッツの考えに基づきつつ、雰囲気の感知がもたらす情態性の変化を捉えようとする。

雰囲気は、襲いかかることで私たちの身体と気分を変化させる、すなわち私たちの情態性を変化させる。そうすると、美がどのように私たちの身体を変化させるのかが問題になる。この点で参考になるのが別の著作での、ベーメの以下の記述である。「たいていの雰囲気において、我々をその情動へと染める傾向が認められる。それゆえに、憂鬱な風景は我々を憂鬱にし、清清しい風景は我々を清清しくする」(NN, 176, ApH, 194)。もちろん、この記述は全ての雰囲気に当てはまるわけではないだろう。ベーメによると、雰囲気には、例えば「小市民的雰囲気」「金持ちの雰囲気、洗練された雰囲気、権力漂う雰囲気」(Ais, 89) のような「社会的性格 (gesellschaftliche Charaktere)」を帯びたものがあるのだが[10]、もちろんこのような雰囲気に関してはこの法則は当てはまらないであろう。美に関しては、ベーメは以上の事実が当てはまると理解する。「もしも私たちが美しいものの雰囲気に入り込んだならば、私たちは美しい気分になる」(NN, 176, ApH, 194)。

「美しい気分」という言い方は、日本語としては自然ではないが、ドイツ語では、気分の良さ、快さを意味する表現として用いられている。「美しい天気 (schönes Wetter)」は「気持ちいい天気」を意味している。ベーメは、「美しいものの経験は快である (NN, 177)」とも述べており、またバーク (Edmund Burke, 1729-97) の「美しさは身体の全組織の固さを弛緩させることによって作用する」という言葉も援用し、美が身体を弛緩させ、快をもたらすものであると理解している (cf. NN, 177)。また別の箇所では、このようにも書いている。「美の経験は概して、生命感情 (Lebensgefühl) の高まりである」(ApH, 194)。

美しいものが、快、気分の高まりをもたらす。このことは、おそらく経験上誰でも確認できることであろう。美しい景色、美しい女性、美しい音などを見たり聞いたりするとき、私たちは気分が晴れやかになったり、愛を感じたり、気分が明朗で心地よくなるだろう(11)。

しかしながら、美の雰囲気が及ぼす作用を快や、身体を弛緩させる作用のうちに認めるだけでは、十分ではない。例えば心地よい雰囲気は、美の雰囲気とどのように違うのか、といった点がまだ不明瞭だからである。

第2節　明確なプレゼンツの雰囲気

この問題を考察するのに、ベーメの「美とその他の雰囲気」(ApH, 192-207)の美に関する記述を細かく見てみよう。

ここでベーメがまず注目するのは、美が「距離 (Distanz)」を要求するものであるという点である。「美しい女性はセクシュアルな女性ではなく、美しい絵画は賛美の為の距離が必要であり、美しい風景は硝子の向こう側にあるかのように見える」(ApH, 193)(12)。また美は誘惑するものであるが、その誘惑は「抑制された」ものであるとも述べる。「美は誘惑するが、しかしそれ自体には近づかせず、距離を要求する」(ApH,194)。

「距離」という概念については、ベーメは詳述していない。だがこの概念を理解する為のヒントは提示しているように思われる。それは「抑制」という言葉である。美は襲い掛かり誘惑するのであるが、美の知覚には誘惑されることを押しとどめるような何かがある。筆者は、この抑制する何かは、私たちが「自意識」と呼ぶような何かではないかと理解する。つまり、美の雰囲気が発散される何かと、「私」との間の距離が意識されるようなあり方で美の雰囲気は知覚されるということである。このように理解すると、「セクシュアルな女性ではない」「賛美の為の距離が必要」「硝子の向こう側」といった記述も納得がいくのではないだろか。

このことを裏づけるように、ベーメは「我々の注意（unsere Aufmerksamkeit）を喚起する」(ApH, 194) とも述べる。注意の喚起は、注意を喚起される私自身についての意識を伴うものだと理解されるだろう。ただし、ベーメによるとこれは奇抜さで目立つことによる注意の喚起とは別のものであり、注意を喚起するものが必ずしも美しいわけではないのである。またベーメは、美は「それが今あるということ（was es ist)」(ApH, 194) によって注意を喚起すると述べる。「美しい女性はまさに美しい女性であり、美しい風景は美しい風景である」(ApH, 194)。このことが意味しているのは、美が美しい「対象」自体を強く意識させるものだということであろう(13)。ベーメは続けて次のように述べる。「何かの美は(…)その輝きだす何か今あるもの（Was-sein）であり、その何か自体としてのその何かの明確なプレゼンツである」。

続けてベーメは、美が「生命感情を高め」「愛情を芽生えさせる」(ApH, 194f.) 作用があることを確認する。その愛は、対象へと近づこうとする傾向性を作り上げるのである。それは「関与（Teilnahme)」とも言い表される。「美は一方では距離を置くものであり、他方ではまた距離を置く経験において関与を承認する」(ApH, 195)。そして最終的にベーメは次のように結論づけるのである。「美は美しい対象の何らかの性質なのではなく、一つの雰囲気である。しかも、我々を魅了し、自己の生命感情を高める明確なプレゼンツの雰囲気」(ApH, 197) である。

以上の記述から読み取れるのは、美が雰囲気として私たちに襲いかかるものであり、また私たちに生命感情を高める快をもたらすものでありながらも、「距離」を要求するものでもあり、それゆえ対象に近づく傾向性を与えるということである。また、「輝き出す何か今あるもの」と表現されているように、また女性や絵画や風景が例として挙げられていることからも分かるように、ひとまず美は何らかの視覚によって知覚される雰囲気として理解されているように思われる。

本論の第1章の冒頭で私たちが確認したように、美は特に視覚的なものに確認されるように思われる。だが他方で、ベーメは雰囲気を特定の感覚器官によってではなく、身体全体で感知されるものだと理解していた。この点は一見矛盾しているかのように思われるだろう。

しかしながら、雰囲気の知覚の過程をもう一度見直すとこの問題は解消するように思われる。確かにベーメは雰囲気の襲われにおいては、身体全体が問題であると捉えていた。だが、雰囲気は「感覚の質に基づいて分離はできないが感官に照応して特殊化できる」(Ais, 42) のであり、感官がまったく関与できないものでない。そもそも美しいを意味するドイツ語の „Schön“ が輝きを表す „Schein“ と同根の言葉であるという事実がある(14)。これらの事実を考慮すると第一に視覚的なものであるとすることに問題はないと思われる。

視覚は、私たちが社会生活を営む上でおそらくもっとも重視される感覚器官である。私たちは、目の前にあるものを、社会的に、文化的・歴史的に規定された「物」として認識する。美を知覚する際も、多くのケースで私たちは美を「何か」の美として知覚しているであろう。ベーメは女性、絵画、風景を挙げていたが、それが花であれ星辰であれ、美はただ美のみが知覚されるのではなく、何かの美として知覚されるのであり、何かを知覚する為には意識を伴うとしても不思議はない。先に挙げた「寒さ」の例が示すように意識が朦朧としている時に漠然と感知されて、次第にその寒さを自覚するケースもあるだろうが、おそらく美は最初から明晰な意識を伴って感知される。このことは聴覚的な美についても当てはまるであろう。聴覚的に知覚されるものに美しいという言葉を用いる場合、「メロディ」、「虫の鳴き声」「人の声」のように、何かの美として、距離を置いて知覚される場合に用いられているように思われる。

つまり、美の雰囲気の性格は、身体全体で感知される快のうちにあるのであり、その快が特に視覚を通して感知されるものであることが意識される場合に、美しいという言葉が用いられているということである。もしもこのように理解

するならば、美しいという言葉が、日本語の「美味」のように味覚に用いられたり、あるいはドイツ語で「美しい」を意味する “schön“ が様々な快に用いられたりするように、この言葉が意味の広がりを持つことも不思議ではないであろう。美の雰囲気の身体全体で感知される本質は、まさに快にあるからである。

ベーメは美を「我々を魅了し自己の生命感情を高揚される明確なプレゼンツの雰囲気」という言葉で表現していた。すなわち、今確かに目の前にあるものに感知される、生命感情を高める快の雰囲気が美なのであり、それゆえに私たちは外部にある対象としてその美に距離を置きつつも、その「輝き出す」作用に魅了されざるを得ないのである。

第3節　欲望、驚嘆、価値

「明確なプレゼンツの雰囲気」というベーメの美の定義からは、美と「欲望」「驚嘆」「価値」との結びつきという別の問題が理解できるように思われる。

A. 欲望

美が快をもたらす「明確なプレゼンツ」の雰囲気であるとするならば、美の雰囲気が感知される対象が欲望をもたらすものであることは理解されよう。というのも、その対象は快をもたらす何かとして意識されるものだからである。ただしベーメは、この欲望が確固とした所有という形で持とうとするものではなく、「距離と隔たりとを無くす傾向性」(NN, 178) を作り出すようなものだと述べる。つまり、美は距離を持って知覚されるのであるが、美の雰囲気の持つ快は距離をなくし、親密になろうとする傾向性を作るのである。ベーメによると、それが欲望の正体であることになる。

B. 驚嘆

美が驚嘆をもたらすことはリルケやプラトンが言及しているが、このことは

美が突然思いもしない仕方で襲いかかることから説明される。ベーメによると美は「意味連関として構成された我々の世界にはある意味で現れてこないもの」(NN,178) であり、私たちの日常生活を放棄するよう誘惑するのである。これは次のようにも理解できるように思われる。つまり、「明確なプレゼンツの雰囲気」である美は、その突然襲いかかり、生命感情を高める快の性格がはっきり意識され、いっそう驚嘆するものとなるということである。

C. 価値

美は、真善とならんで価値として理解されてきたことが知られている。

価値の問題も、美が「明確なプレゼンツの雰囲気」であることから理解されるであろう。すなわち、美は、日常生活のうちにあって、いわば日常生活の文脈を超えた快をもたらすものなのである。それに「明確なプレゼンツの雰囲気」として距離を置いて確認される美は、私たちを魅了する何か確かなものがそこにあるという意識を伴い得るものであろう(15)。

ここで、第2章で理解したことをまとめよう。

美の性格は、私たちを魅了する快に認められる。また特に、「明確なプレゼンツの雰囲気」として、距離を持って知覚される雰囲気、特に視覚的に快をもたらす雰囲気に認められる。また美は、距離を持って知覚される聴覚的雰囲気にも認められ、またその本質は快にある為に、幅広く快一般に用いられてもいる。だが距離を置いて知覚される点で美の雰囲気は特殊であり、それがゆえに、美は欲望、驚嘆の対象ともなり得た。また美は価値とも結びつくようになった。このように理解するならば、今日の幅広い美の概念の使用が、例えば芸術作品の評価に際して美という言葉が用いられている理由なども、理解できるように思われる。

第３章　美の諸相

ベーメの美の考察は、その著作に断片的ではあるが広く認められる。本章ではこれらの記述を、自然、日常生活と芸術、人間という三つの領域に整理して論じることで、現代における美の意味を考察していきたい。そのことで、これまでの本論の論述からは見えてこなかった美の意味と、美の問題の射程が見えてくるであろう。

なお、本論の最初で述べたように、ベーメは美を特別視してきた従来の美学には否定的であり、これまで目があまり向けられてこなかった多様な雰囲気に目を向けるべきだと考えている。それゆえに本章でも、ベーメの述べる雰囲気のあり方に目を向けつつ美の意味を理解していきたい。

第１節　自然

自然という言葉から、私たちはおそらく、植物、動物、岩石あるいは、それらが見出せる領域、河川、森林、海などをイメージするであろう。従来の美学もおそらくそれらをイメージしてきたように思われる。ベーメは、一方で、これら従来の美学が扱ってきた領域を雰囲気という視点で問題にし、他方で、従来の自然という概念を抜本的に考え直し、自然とは何かについて一定の見解を示そうとする。自然の美の意味はこのような問題意識のうちに探られている。

A

「感性的自然認識（Ästhetische Naturerkenntnis）」（Atm, 177-190）においてベーメは、自然特に生物における「コミュニケーション的関係」に注目する（cf. Atm, 183ff.）。ベーメは動物学者のポルトマン（Adolf Portmann, 1897-1982）やボイテンディク（Frederik Jacobus Johannes Buytendijk, 1887-1974）の考えを援用しつつ、生物にはコミュニケーションの為に何かを

提示し、何かを受け取る能力がそなわっている点を指摘する（cf. Atm, 187)。ポルトマンによると、何かを提示する能力は、何かを受容する能力より古くから見られ、幅広く認められる。というのも、生物には「何の役にもたたず、何の目的も持たない」「何ものにも向けられていない自己呈示」(Atm, 189) が存在しているからである。花の様々な形態や匂い、鳥の鳴き声など、生物は様々な形態や色彩を示し、あるいは音や匂いを発しているが、多くのケースでそれには理由も目的も認められないのである。だが、花に対する昆虫の関係が示しているように、生物はこの「自己呈示」を受け取る能力を持つようになった。ベーメはこれを、生物の他者に働きかける力を持つこと、すなわち「自らを抜け出すこと（Aus-sich-Heraustreten)」(Atm, 189)、「脱自（Ekstasen)」(Atm, 187) だと理解する[16]。

以上のようにベーメは、生物の様々な形で自己呈示する能力と、それを受け取る能力について言及しつつ、それを雰囲気理論の基盤になり得ると理解する。何故なら、人間の知覚は、このような生物の自己呈示を受け取り「情動的に気分付けられることができる」(Atm, 189) からである[17]。植物や動物の多様な表れ、特に視覚的な表れ（花など)、発する音（鳴き声など）に対して、それが生命感情を高めるような快をもたらすものであれば、「美しい」という言葉が用いられていることは、様々な文化で認められるように思われる。

B

もちろん、私たちが情動的な襲われを体験し得るのは、生物の領域に限られずいわゆる無生物の領域からも体験し得る。『生態学的自然美学』の幾つかの論文[18]で、ベーメはこのようなコミュニケーション的関係という視点から、自然とは何かを抜本的に考え直そうとしている。

ベーメは都市の歴史をたどりながら、自然と人間の関係を考察する。ベーメによると、古代ギリシャでは、自然は都市の外部にある領域であり自然と人間

の関係は外的なものであった（cf. FöN, 60ff.）。近代以降、別荘や公園の発達とともに自然は都市の内部に取り入れられることになり（cf. FöN, 62ff.）、さらに現代では、都市計画において野生のままの自然を残す試みもなされているのだが（cf. FöN, 66ff.）それでも人間の自然との関係は外面的なものにとどまった。というのは、自然が理性的人間の外部にある領域であるという認識は変わらなかったからである。ベーメによると、カントからアドルノ(Theodor W. Adorno, 1903-69）に及ぶ近代以降の自然美学は、自然のうちに「理性の他者」(FöN, 42)、すなわち人間の理性の外部の領域を認めたのであるが、理性的存在たる人間は自然を人間の外部の領域として、社会に対する「ユートピア的対立像」(FöN, 45)としてしか評価できなかったのである。それに対してベーメは、環境問題が深刻化する今必要なのは、自然との「内的関係」を築き上げることだと述べる（cf. FöN, 71ff.）。

大切なのは身体を持つものとして「私たち自身が自然である」という認識である、とベーメは述べる。身体を持つものとして人間は、養分を取り、呼吸し、また多様な雰囲気に影響される存在である（cf. FöN, 74)。人間にとって、身体が既に「理性の他者」というべきものなのであり、この身体を通して他者とのコミュニケーション的関係を持つものなのである。このように理解すると、もはや人の手の加わったものを、自然と区別する必要性自体疑わしくなるだろう。人の手の加わったものでも、私たちの身体と何らかの形でかかわりを持つ自然としての側面を持っているからである。また私たちが自然と述べているものも、何らかの意味で人間と関係を持っているとベーメは述べる。「人間は、厳密な意味で内実的に人間とは無関係な自然を持っていない」(FöN, 47)。それゆえ、私たちは私たち自身の自然にとってより良い環境を作り出す、あるいは保存する必要があるのである。

このような自然という関連で美はどのように理解されるべきであろうか。

ベーメは、美を「感性的・情動的（sinnlich-emotional)」な「栄養（Nahrung)」

(FöN, 93, cf. ibid. 46ff.) であるという考えを提示する。ベーメによると、「人間は自己自身とは別のものへの深い要求を持って」おり「自己自身にしか出会えない世界に生きたいとは思わない」(FöN, 92) のであり、多様な外部のものとのコミュニケーションを求めている。既に述べたように美の身体に快の作用を持つものである。すると、美は外部の多様な自然と友好的な関係をもたらす雰囲気であると理解できるであろう。

第2節　日常生活と芸術

前節の分析からも、私たちは、日常生活において美を含む様々な雰囲気に影響を受けていることが読み取れるであろう。「一時的なものの美学」(FöN, 166-189) という論文では、日常生活における雰囲気の問題が探られており、本論の主題である美の問題を考察する上でも有益であるように思われる。

この論文では、「一時的なものの美学」が主張されている。ベーメによると、「一時的なもの」、すなわち雰囲気は、ヴォルフ (Christian Wolf, 1679-1754) からアドルノに及ぶ「古典的美学」では、「仮象＝輝き (Schein)」として理解されてきたものであり、殊に美が問題にされる時には、一時的なものが問題にされてきたのである。ところが、古典的美学は、趣味判断の美学として展開し、完結した芸術作品に固執したがゆえに、一時的なものを十分に評価できなかった (cf. FöN, 169ff.)。理性、心、人格が大切であるとする人間理解の伝統、偶然性より存在を重んじる哲学的伝統、人間の地位や名声を重んじる社会的伝統が、一時的なものの評価を阻害したのである (cf. 176f.)。

ベーメは、「一時的なものの美学は、どんなことがあっても芸術や芸術作品の理論では在り得ない」(FöN, 179) と述べる。しかしながら、芸術において一時的なものが読み取れる可能性は否定していない。何故なら芸術は、「ありふれた対象や日常を主題にしている限りで」一時的なもの関係しているからである。このような視点から、ベーメは日常の知覚を問題にする。この際、ホフマン＝

アクステルム（Dieter Hoffmann-Axthelm,1940-）の考えが援用されている。

ホフマン＝アクステルムによると、私たちの日常の知覚は、知覚内容を選択し、意味を補い情報として受け取っている。私たちが知覚するのは、恒常的に存在しているものとして理解される「対象」であり、使用目的や社会的意味を担った「道具」である。また現代社会でますます支配的になっている知覚は、何らかの仄めかしで意味内容を伝える「信号」の知覚である。もちろん、このような知覚なしに私たちは日常生活を営めないわけでありその重要性は否定できないが、このような支配的な知覚によって、一時的なものに目が向けられることは少なくなっているとベーメは理解する。

では如何にして一時的なものに出会うことができるのか。ベーメは三つのケースを例に挙げる。第一に、ゴッホの描いた農夫の靴に示されているような、事物の今現在の表情にそれは表れている。私たちが見るのは、商品としての靴ではない。使い古されることで姿を変えた靴の今ここにある様であり、偶然的で一時的な様である。第二に、目の前にある事物の偶然の配置である。ここには、事物間の意味連関は存在していない。それがゆえに、私たちは「事物の単なる今ここにある姿（プレゼンツ）」(FöN, 178) に注目できる。第三に、印象派の画家が目を向けたような、事物に見られる「光と影の戯れ」である。事物は、一日の間に、また一年の間にそれに注ぐ光によって多様な姿を見せ、多様な気分を発散している。それゆえベーメは、一時的なものに気づく為の方法として、目の前の光景を凝視し、事物の偶然の姿に目をむけること、加えて眼差しの逆転、すなわち「主体がいわば、事物によって見つめられるように感じること」(FöN, 186) を提案する。つまり、それは周囲の事物が私たちに及ぼす雰囲気的な作用に気づき、自覚するということである。

注目すべきは、ここでベーメが挙げた例は、多かれ少なかれ芸術創造とかかわりがあるということである。ベーメ自身、一時的なものに目を向けてきた芸術として、ムリーリョの風俗画、数多くの静物画、印象派の絵画、日本の俳句

や浮世絵、ゴットフリート・ベンの詩、プルーストの小説を挙げている（cf. FöN, 178f.)。

また筆者には、ベーメがここで示す日常生活において知覚される一時的なもの、雰囲気の多くは美という言葉で表現され得るものだと思われる。確かに、美しいという言葉は、花や宝石、山頂からの眺望のような特定のものや光景に好んで用いられている。おそらく多くの人がこれら対象に美を知覚するであろう。しかしながら他方で、例えば古ぼけた民具、歴史ある古い街の風景などを美しいという場合もある。既に述べたように、美の雰囲気としての作用は快にある。それゆえ、私たちが気持ちを穏やかにする快の作用を特に視覚（おそらく聴覚も)によって感知するならば、それは美といって構わないものであろう。そうすると、美の雰囲気には、意味に縛られた日常の見方から離れることで感知されるような、隠れたものも存在していると言えるのかもしれない。とはいえ、もちろん感知される雰囲気は美だけでなく、様々な雰囲気を私たちは日常生活において感知され得るだろう。「一時的なものの美学」からは、日常の見方を変えることで日常のありふれたものに、美を含む様々な雰囲気が感知されること、またこのような雰囲気こそ美学が問題にすべきだという主張が読み取れるのである。

第3節　人間

人間の美については「美しく・在ること（Schön-Sein)」(NN, 160-179)[19]という一つの論文で、集中的に論じられている。注意すべきことは、ここでは美しく「在る（Sein)」ということが問題だということである。雰囲気として美は一時的なものであり、あるいは「仮象＝輝き（Schein)」「表れ（Scheinen)」とも理解されるものである。人間の美も、「特別な資格をもった外見」(NN, 166)を意味しており、身体を通して他人を魅了することが問題であるから「身体をもってその場にいること（leibliche Anwesenheit)」の問題と理解される。とこ

ろが人間にとっては、美の雰囲気を、どのようにして意識的に身にまとうかが問題になる。つまり、ここでは、自己の身体における美の産出が問題であり、「外見についての自己理解」(NN, 170) が問題なのである。

A

ベーメによると、美が自己理解の問題として重視されたのは、ソクラテス以前の前古典期のギリシャ、そして中世後期からバロックにかけての貴族文化においてである (cf. NN, 169)。しかし、近代市民社会では、勤勉、清貧、節度、謙虚が美徳とされ、美は自己理解から遠ざけられ、個人が達成可能な富や業績が重視されることとなった。当時人間の美は、自然の賜物、あるいは高貴な血筋を意味していたが為に、人間の自己理解から遠ざけられることになる (cf. NN, 162)。現代でも美しい人間の典型は女性であるが、それはより身体的で、自然に近いと見なされていたがゆえだったとベーメは述べる (cf. NN, 169)。その為に人間の美を問題にするのは、「侮辱」(NN, 162) に等しい行為と見なされることにもなった。

しかしながら、ベーメは現代、美は人間の自己理解の問題になってきていると理解する。ベーメがまず指摘するのは、20 世紀の哲学的人間学、特にプレスナー (Hermuth Plessner, 1892-1985)、クラーゲス (Ludwig Klages, 1872-1956)、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-80) が直接に美を問題にしてはいなくとも、表情の問題として人間の外見を問題にし、あるいは他者の身体に魅了されることを問題にしていることである (cf. NN, 166ff.)。このことは、「身体をもってその場にいること」への問題意識の高まりを示している。さらにベーメは、テレビや雑誌などのメディアでは、人の外見がますます問題にされている点、若者が問題にするのは、もはや勤勉や清貧などの近代的な道徳ではなく、自らの外見である点を指摘する (cf. NN, 170)。現代でも就職や選挙など諸々の価値判断で人間の美を問題にすることは否定される傾向はあるのだが、

その一方で、自分の美しさや他者の美しさは、多くの人が意識せざるを得ない状況になっているのである。

B

しかしながら、美に対する人間の自己意識を問題にするには、さらに問題点として理解しておかなければならないことがある。

それはまず、現代の人間はもはや、人間における自然な美しさが何であるかを理解できないということである。ベーメによると、私たちの美しい人間のイメージは「とうに広告や視覚メディアによって規定されて」(NN, 163) いるからである。化粧や装身具などは、美を獲得可能なものにしたのであり、化粧によって生み出された美は複製されている。このことは、作り出された美に対する不快感を一方ではもたらしている。例えばそれは、美しくなることを強制することへの、フェニミズムの反感にも表れている。

加えて、人間において所与の美が信じられなくなることで、美と情動、あるいはセクシュアリティとが切り離せないものになった点が挙がる。美しく在ろうとすることは、自分自身を他人の目にさらされる対象としてしまう可能性、あるいは、ジヒターマン (Barbra Sichtermann, 1943-) の表現では「性的な存在」(NN, 165) にしてしまう可能性を伴っているのである。それゆえ「美しく在ること (Schönsein)」と「人格で在ること (Person-Sein)」(NN, 165) とが対立することにもなる、とベーメは述べる。

C

このような諸問題を念頭に置きつつ、では如何に美の雰囲気を身につけるかを考察しよう。ここで特に問題になるのが、化粧などの美しくなる為の客観的要因である。

確かに化粧がそうであるように、人間が美しく在ることは、客観的規定に基

づくものである。しかしながら、美と客観的規定とを同一視もできない。古代以来の美をプロポーションで説明する教説が時代遅れになったことが示すように、いくら客観的規定を挙げても美の説明はできないのである。では、化粧の意味は何か。ベーメは化粧の基盤は「自己の外部に現れ出ること(Aus-sich-Heraustreten)」を可能にし、「美しい人間の存在感を際立たせる」(NN, 173) ことにあると理解する。つまり、化粧もまた、他者に雰囲気を発散する為に必要とされているのである。

だが人間の美がどういうものかを社会生活から学ぶほかない私たちは、「美しく在る」為には、社会で通用している「美のイメージ」「美の理想像」(NN, 173) を遠ざけることはできない。それゆえ、美しく在る為には、美のイメージを通して、美の雰囲気を呼び起こさなければならないのである。このことが意味しているのは、化粧などの「客観的徴標 (Merkmale)」が単なる「凝固したイメージ」や「見せかけ」を作ってしまうこともあり得るということである。それに美の雰囲気は「確固とした所有物の意味で持つことはできず、所有物に即して何らかの方法で確認できるものではない」(NN, 174)、まるで魔術のように美の雰囲気を呼び起こすほかないということである。

それゆえに、私たちは「美しく在る」為に、美を「実存化 (existieren)」、すなわち「気遣いの構造 (Sorgestruktur)」(NN, 175) に置かなければならないとベーメは述べる。だがこの事実のうちに、美しく在ろうとする人間の「内的危険」が認められるのである。

美しく在る為には、「美しく在ろうと欲すること (Schönsein-Wollen)」(NN, 176) という意図性の契機が必要である。ところが、意図しすぎるとわざとらしくなってしまう。私たちは、私たちの外見において作り出された美が自然に見えるように努めなければならないことになる。そのことから生じる危険はベーメによると「嘔吐」である。サルトルによると、嘔吐は「物象化された身体性への情動的反応」(NN, 176) だからである。

嘔吐の危険から逃れる為の手段として提示されるのが「ナルシシズム」(NN, 176) である。ベーメによると、ナルシシズムは美しく在る為の「不可欠な要因」である。つまり、私たちは他者を魅了する為に、まず自分自身を魅了しなければならないということである。ナルシシズムによって、「行為する主体」と「作られた客体」の間での崩壊から、「美しく在ること」を救うことができる。またナルシシズムによって、「身体としての自己自身を情動的に了承すること」(NN, 176) ができる。これはジヒターマンの言葉では、「自分自身を性的な実存として選び出す」(NN, 176) ことでもある。しかしながら、他方では、このことにもまた危険が伴っている。つまりナルシシズムには、「自分自身に魅了されることが偏狭な言動に、見られる対象になりたいと思うことが自尊心に、自己放棄が売春や露出癖に転じる」(NN, 176) 危険が伴っているのである。

以上のベーメの考察から読み取れることは、殊に人間において、美の雰囲気は社会性・文化性を帯びたものではないか、ということである。美の本質はここでも人を魅了する快に認められるのであるが、この雰囲気を産出する為には、美の理想像に頼る必要性があるからである。反面で美の雰囲気は、美しくなろうとする意図が見えてしまうと感知されないともベーメは述べていた。おそらく美の雰囲気は、あくまでもその作用に本質があるのであり、意図に意識が向かってしまうと、雰囲気の感知が妨げられてしまうと理解できるように思われる。これは、対象、道具、信号に意識が向けられると、雰囲気の感知が妨げられるという前節で示された考えとも通じるものである。

だがそもそも何故あらゆる雰囲気の中で特に美の雰囲気を人間は求めるのか、という疑問が生じるだろう。おそらく、その理由は美が「明確なプレゼンツの雰囲気」であり、距離をもって知覚されるものであることに求められるだろう。距離をもって知覚される美は、何らかの明確さ、確かさを要求するのであり、私たちはその確かさを身につけたいと願うのである。だがそのことは上述の危険も伴うものなのである。

以上、第3章では、自然、日常生活、人間という三つの側面から、ベーメの美の理解を見てきた。いずれにおいても、美の本質は快をもたらす雰囲気的作用に認められることが確認された。また美の問題の広がり、その日常生活における重要性も確認され、美が知覚、産出どちらの面でも重要性を持っていることも確認された。

おわりに

本論では、ベーメの著作に依拠しつつ雰囲気の問題として美を論じてきた。美は、主観にも客観でもなく、雰囲気であることが第1章で理解された。第2章では、美の身体の情動性に及ぼす作用が生命感情を高めるような快に確認され、特に「明確なプレゼンツの雰囲気」として理解されるものに美の雰囲気が確認された。第3章では、以上の理解を念頭に、ベーメが自然・日常生活・人間においてどのように美の意味を理解しているかが探られた。

現代、美は崇高などと比較するとあまり重要視されていないかもしれない。おそらくその理由は、例えば「趣味判断の問題」などとして、美は形骸化された形でとらえられ、美の雰囲気としての作用が忘却されてしまっていることにあるのではなかろうか。しかしながら、もしも美を雰囲気として理解するならば、美は他の雰囲気と同様、情動的に襲いかかる力を持つものとして理解される。この作用に目を向ける限り、美は人間にとって大きな意味を持ち続けるものであるように思われる。

「雰囲気」は、近年になって、様々な関心を呼んでいるテーマである。雰囲気という概念を積極的に受け入れ様々なテーマに取り組む論者がいる一方で、この概念に疑念を示す論者もいる(20)。それに本論では、ベーメの雰囲気概念に依拠したのであるが、シュミッツもまた雰囲気を論じており、二人の間にはこの概念の理解に微妙な差異が存在している(21)。雰囲気という概念は、今後も

様々な視点で検討が必要であろう。また本論では、美というテーマに絞って雰囲気を論じたが、その他様々な問題をこの視点から論じることも可能であろう。またそのことで、雰囲気という概念の理解が深まることであろう。

註

ベーメの著作、およびシュミッツの著作からの引用、および参照箇所は、次の略号を用い、本文中に、略号および、その後に参照頁の数字を記すことで示す。

Gernot Böhme :

Anthropologie in pragmatischen Hinsicht, Darmstäter Vorlesungen, Frankfurt / M.: Suhrkampf 1985. (=ApH)

Für eine ökologische Naturästhetik, Frankfurt / M.: Suhrkamp 1989. (=FöN)

Natürlich Natur. Über Natur im Zeitalter ihrer technischen Reproduzierbarkeit, Frank- furt / M Suhrkamp 1992. (=NN)

Atmosphäre Essays zur neuen Ästhetik, Frankfurt / M.: Suhrkamp 1995. (=Atm)

Kants „Kritik der Urteilskraft" in neuer Sicht, Frankfurt / M.: Suhrkamp 1999. (=KnS)

Aisthetik Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre, Wilhelm Fink Verlag 2001. (『感覚学としての美学』井村彰他訳，勁草書房 2005 年) (=Ais)

Hermann Schmitz :

System der Philosophie Bd. 2 Teil 1. *Der Leib*, Bonn, 1965. (=II/1)

System der Philosophie Bd. 2 Teil 1. *Der Leib im Spiegel der Kunst, Bonn*, 1966. (=II/2)

System der Philosophie Bd. 3 Teil 2. *Der Gefühlsraum,* Bonn, 1969. (=III/2)

System der Philosophie Bd. 3 Teil 4. *Das Göttliche und der Raum*, 1977. (=III/4)

Der unerschöpfliche Gegenstand. Grundzüge der Philosophie, Bonn, 1990. (=DuG)

(1) ベーメの著作は、論文集という形のものが多い。以下、著作に所収された論文名を記し、著作名を上記の表記で記す。

(2) 拙論「美のシャインについて」(文芸学研究第 8 号 55 頁以下) を参照されたい。ここで筆者はドイツの哲学者パーペート (Wilhelm Perpeet, 1915-2002) に基づいて、視覚的な輝きとして美を考察した。パーペートは美をその現れが生命感情を高めるものとして理解し、醜を生命感情を停滞させるものだと理解している。cf. W. Perpeet, *Antike Ästhetik*, Freiburg, pp.11-14; *Vom Schönen und von der Kunst*, Bonn, 1997, pp.69-72.

(3) 「感知 (Spüren)」という言葉を用いる場合、特にベーメは「身体 (Leib)」を通して何かに気づくことを言い表している。「知覚 (wahrnehmen)」はそれを含みより広い意味合いで用いられている。

(4) 「情態性」という言葉は、「ある状態にあること (sich befinden)」と、「その場に居合わせていること (da sein)」の二つの意味を含んでいる。それゆえ「気分 (Stimmung)」に近い意味であるが、身体をもってある場所にいることを含意するこの用語をベーメは好む (Ais, 78)。

(5) cf. G. Böhme, Atmosphäre, 東京藝術大学美術学部美学研究室編『カリスタ　美学・藝術学研究』No. 4,1997. 141 頁。(同誌には、阿部美由起氏による邦訳も掲載されている。なおこの邦訳は『雰囲気の美学—新しい現象学の挑戦—』梶谷真司他訳, 晃洋書房 2006 年、2-16 頁にも再掲載されている)。

(6) G. Böhme, Atmosphäre,『カリスタ』No.4, 140 頁。

(7) シュミッツの「新しい現象学 (Neue Phönomenologie)」が提示する多様な概念は、ベーメの哲学の基盤となっている。シュミッツはこれまでの哲学は、十分に「主観性」を理解できなかったと主張する。シュミッツによると、「A は悲しい」と述べる時、A が悲しんでいるという事実は、全ての人が理解可能な「客観的事実」である。しかしながら、悲しんでいる本人が感じる切実さ、ニュアンスは本人以外には決して理解できない。ここに「厳密な意味での主観性が認められる」と考える。cf. III/2, 49, 54, 59, 69, 92f. ; DuG, 5ff. シュミッツの主観性については、梶谷真司『シュミッツ現象学の根本問題』(京都大学学術出版会, 2002 年) 53 頁以下に詳しい。

(8) シュミッツは「どのような感情も、[…] 身体の揺動 (leibliche Regung) によってのみ、主体の情動的経験に入り込む」(III/2, 152) と述べている。

(9) シュミッツの現象学は「狭まり (Engung)」「広がり (Weitung)」「狭さ (Enge)」「広さ (Weite)」といった概念を用いることでこの身体空間の変容を捉えようとしている。驚きと苦痛の体験では、身体の「狭まり」が見出せる。驚いたとき私たちは縮みあがり、ぼんやりした状態からまるで自分自身へと投げ返されたかのように感じる。苦痛においては、私たちは身体に縛りつけられ、そこから逃げ出すことができないかのように感じる。このとき感じられるのが、絶対的な場所としての「今ここ (da)」(シュミッツは「狭さ」という) である。逆にまどろみや恍惚感を感じるとき、私たちは、周囲の広がり (シュミッツは「広さ」と表現する) のなかに自らが溶け言って、「自分が世界と一つになる」ように感じる。この身体が拡張するような感覚を、シュミッツは、身体の「広がり」という言葉で表現する。cf. II/1,73-97; II/2,19-36; DuG, 121-127. 梶谷, 前掲書, 137-141 頁も参照。

(10) ベーメは雰囲気を暫定的に、「社会的性格」「共感覚 (Synästhesien)」「気分 (Stimmungen)」「コミュニケーション的性格 (kommunikative Charaktere)」「運動による気分付け (Bewegungsanmutung)」の五つに分類している (Ais, 89f.)。「共感覚」は「青が涼しさを感じさせる」といったように身体の情態性と関係が深いもの、「気分」は「憂鬱な光景」のようにある気分を感知させるもの、「コミュニケーション的性格」は「会議の緊迫した雰囲気」のように人間間の関係性が産み出すもの、「運動による気分付け」は「重くのしかかる雰囲気」のように動きが感じられるものである。また、これらは明確に区分されるわけではなく、重なり合うこともあるとも述べている。つまり、雰囲気自体は漠然と感知されるものであり、それを分析する際に、以上のような分類が可能なのである。

(11) シュミッツも美を同様に理解している。「美は、感情というよりもむしろ身体活動の基本タイプ、すなわち欠如的広がりに対応するものだといえよう。ここでは自らを「自由で軽やか」であると感じるといった仕方で、広さは狭まりから解放され、身体の狭さから脱け出すのである。狭まっていく緊張により、広さが阻害されることはまったくないか、ほとんど目立たないあり方でしか阻害されることはない。狭さは主に、ただそこから彼が解放されるところとしてのみ感知されることになるのである」(ÎII/4, 662) 。「欠如的広がり (Privative Weitung)」、すなわち、「狭まり」を伴うことのない「広がり」のうちにシュミッツは美の性格を認めているのである。また「そこから解放される場所」として「狭さ」、すなわち「今ここ」が感知されるとシュミッツは述べる。「欠如的広がり」については、II/1, pp.126-142 を参照。

(12) ただし、ベーメは女性の美しさとセクシュアリティの関係を否定していない。人間の美について、「美はエロス的雰囲気をともなった相貌である」(Atm, 130) と記している。本論、第 3 章第 3 節も参照。では、何故ここで、美しい女性を、セクシュアルな女性と区別するのか。それについては、クラーゲスの「遠さのエロス」の概念がヒントを与えてくれる。ベーメによると、それは「形象の現実性 (Wirklichkeit der Bilder)」に満足し、身体の近さに押し入ろうとしないエロス」(Atm, 193) である。つまり、美は、性的なものとは同一視できない距離を前提にしているということである。cf. Ludwig Klages, Vom kosmogonischen Eros, Bonn 1972, p.92. (邦訳,『宇宙生成的エロース』田島正行訳, うぶすな書院, 2000 年, 81 頁)。

(13) ベーメは、プラトンが美を「最も輝くもの (tó ekphanistaton)」、ヘーゲルは観念論的に「現出的理念 (erscheinende Idee)」と呼ぶのであるが、これはまさにこのことを意味していたと言う。Platon,Phaidros, 250 d 7. Hegel, Ästhetik Bd.1, Werke Bd.13, Frankfurt/M.: Suhrkamp p.230f.

(14) W. Perpeet, Antike Ästhetik, p.11.

(15) ベーメとの関係で、価値の問題に注目した論考としてはミヒャエル・ハウスケラー (Michael Hauskeller,1964-) の「美は雰囲気であるか」が注目される。(Ist Schönheit eine Atmosphäre? Zur Bestimmung des landschaftlich Schönen in: *Naturerkenntnis und Natursein. Für Gernot Böhme,* Herausgegeben von Michael Hauskeller, Christoph Rehmann-Sutter und Gregor Schiemann pp.161-175, Frankfurt / M.: Suhrkamp 1998. 以下、この文献の引用箇所、および参照箇所については、括弧内にページ番号のみを記す)。ハウスケラーは、ベーメの美についての考察を批判的に検討しつつ、美の本質は、美の雰囲気ではなく、美

がもたらす「絶対的価値」(175) のうちに求めようとする。
ハウスケラーは美の雰囲気の存在、すなわち美が私たちに愛情を芽生えさせたり安らぎを与えたりする作用を持つものであることは否定しない (cf.164)。にもかかわらず、ハウスケラーが、「絶対的価値」のうちに美を求める理由は、たとえ美しくつくろっても、美の内実を伴わないケースが存在していると考えるからである。バーバラ・ジヒターマンによる現代の消費社会における美の考察が引き合いにだされている。ジヒターマンによると、現代社会の至るところに美しく装われたものが存在しているが、それが美の見せかけに過ぎないことに気づいてしまうがゆえに真の美ではないと言う。ジヒターマンはそれを「見せかけの美学 (Ästhetik der Fassade)」と名づけている。ハウスケラーはこのジヒターマンの考えに基づきつつ、美の内実は美を保証する価値に認められると考える。
美を価値のうちに認めようとするハウスケラーの見解は、一見、美を雰囲気として理解するベーメとは大きく異なるように思われる。しかしながら、ハウスケラーも美の雰囲気的作用の存在は否定していない。そもそもそれを否定してただ価値のうちに美を求めるならば、美は真や善と区別できなくなるであろう。またハウスケラーは、人間には近づき得ない領域であるがゆえに自然に美の価値の保証を認めるのであるが、これは自然が人間の使用や目的、すなわち人間の日常的な文脈から離れた領域であるからであり、美が日常を超えた作用をもたらすとするベーメの見解とも一致している。
ハウスケラーが美の雰囲気を認めている以上、両者の見解には大差がないようにも思われる。にもかかわらず、ハウスケラーが美の本質を「価値」のうちに求めようとするのは、日常の文脈を超えた雰囲気の作用に、「距離」をもってそれを認識することのうちに他の雰囲気とは異なる美の特徴を認めようとしていたからであると理解される。
ハウスケラーの見解で、注目すべきと思われるのは、美しく見せかけられたものが、美の価値を保証しないという点である。またその理由をハウスケラーは、それが見せかけのものであることを意識してしまうことに認めていた。このことはすなわち、作り物めいた美しさは、意図や目的を見せてしまうがゆえに、日常を超えた雰囲気の作用を感知させなかったり、覆い隠したりしてしまうと理解できるだろう。この点は、本論第 3 章第 3 節で見るようにベーメの見解とも一致しているのである。

(16) パーペートもポルトマンを援用しつつ、生物が外部に向かって様々な姿を見せること、またその姿が「美しい」と表現されるべきものであることに注目し、それを「生命美 (das lebendige Schöne)」と名づけている。cf. W. Perpeet, *Vom Schönen und von der Kunst*, Bonn, 1997, pp.77-83. 拙論「美のシャインについて」(註 3) も参照されたい。

(17) カントの『判断力批判』の 42 節の次の箇所にベーメは注目する。「自然がその美しい形式をとおして形象的に私たちに話しかける […] 暗号文の真の解釈」(KdU², 170) 。「光の変容 (色彩) と響き (音) は […] いわば自然が私たちに話しかける一つの言語、しかもより高い意味を持つように見える一つの言語を含む」(KdU², 171f.)。ここでは、自然の放つ雰囲気の作用が問題にされているように見える。ところが、カントは、この作用自体を雰囲気として基礎づけることができない。それゆえ、それを人間による解釈の問題にしてしまう。「鳥のさえずりは喜

びとその生存に満たされていることを告げている。すくなくともそのように、われわれは自然を解釈する。それが自然の意図であろうとなかろうと。」(KdU², 172) cf. Atm, 188; KnS, 44ff.; Ais, 46.

(18) Die schöne Natur und die gute Nature (FöN,38-55), Die Mensch-Natur-Beziehung am Beispiel Stadt (FöN, 56-75), Die Bedeutung des englischen Gartens und seiner Theorie für die Entwicklung einer ökologischen Naturästhetik (FöN, 79-95).

(19) 邦訳,「美しく——在ること」古川裕朗訳,『雰囲気の美学——新しい現象学の挑戦——』梶谷真司他訳, 晃洋書房 2006 年, 237-260 頁に所収。

(20) ベーメの雰囲気概念に触発された諸研究としては、例えば、Neue Ästhetik, Das Atmosphärische und die Kunst, Wilhelm Fink, 2002. 所収の多様な研究者による論文を参照。ベーメの雰囲気概念への批判的見解としては、ヴォルハルト・ヘンクマン「雰囲気・気分・感情」松尾大・阿部美由起訳(『カリスタ　美学芸術論研究』14、2007 年 20－75 頁) を参照。

(21) ベーメとシュミッツの雰囲気概念の差異については、古川裕朗「ヘルマン・シュミッツとゲルノート・ベーメの雰囲気概念をめぐって」(『人間環境学研究』第 3 巻第 2 号、2005 年) を参照。